

◆ 地域活動

ヤイトハタ養殖指導

八重山農林水産振興センター 知名真智子、山田真之

1. 目的

八重山地区では、平成10年からヤイトハタの海面養殖を実施している。養殖が始まって10年以上が経過し、近年では、比較的安定して生産できるようになったものの、疾病発生（主に寄生虫症）による斃死が散見される。

昨年に引き続き、ヤイトハタ養殖生産者に対し、水産海洋研究センターと連携して、種苗配布、魚病対策、その他飼育管理についての現場調整や指導を行った。

2. 活動内容

1) 平成25年度ヤイトハタ種苗の配布

今年度より、八重山地区のヤイトハタ種苗が栽培漁業センターから配布されることとなった。栽培漁業センターからの種苗輸送は初めてということもあり、事前に生産者会議を開催して手順確認や配付スケジュールの調整を行なった（7/4、7/25）。種苗輸送に利用できる貨物船の運航が1回/週しかないこともあり、生産者の要望にあわせて全長40～120mmサイズで順次配付した。

輸送にあたっては、県関係機関（栽培漁業センター、水産海洋技術センター、八重山農林水産振興センター）と漁協、運送会社とで密に連絡を取るよう体制を整えた。このため、全ての輸送において、輸送が原因と思われる斃死等は確認されなかった。台風接近によるフェリー欠航が2回、陸送会社との連絡調整不足による輸送中止が1回あり、追加要望を含む全ての種苗配布完了までに約3ヶ月を要した（配付期間7/23～10/15、配布数107千尾）。

また、今期は各生産者が要望する種苗サイズが異なっていたため、特に問題とはならなかつ

たが、要望が特定の種苗サイズに集中した場合には、輸送機材（輸送タンク・レギレーターなど）の確保が難しくなる。

2) 寄生虫対策指導

種苗導入直後から4週間目までの寄生虫対策を中心に、養殖場での観察と飼育管理指導を行った。昨年と異なり、今期は種苗導入2週間目頃からエラムシ寄生とあわせて、体表のスレ・ビランが多く確認された。これらが主因となり、種苗の初期生残率は約40%であった（昨年度と同程度）。

今期の種苗で目立ったスレ症状については、その原因は明らかになっていない。魚病診断でビブリオ菌や滑走細菌が検出されているものの、2次感染の疑いが強かった。

3) 養殖場環境調査（10月1日）

八島魚類養殖場の現状を確認するために、潜水による目視観察と底質調査を行った。養殖場内の海底には、約10～30cmのシルトが堆積しており、養殖場北側（浅場に近い場所）ほど堆積量が多かった。底質は、その表面は淡茶色であったものの、少し掘ると黒く硫化した堆積物が確認された。また、海底には残餌やゴミ（漁網や網かご等）が多く落ちていた。

供用開始から10年以上が経過した養殖場だが、今後長く利用していくためにも、海底清掃や給餌方法の検討など、適切な管理が必要だと感じた。今後の対策（取組み等）については、生産者・漁協・市役所を交えた話合いを持ち、検討していきたい。



ヤイトハタ種苗受取（港での確認）



ヤイトハタ種苗受取



エラムシ寄生によりシェルターから散逸する種苗



寄生したエラムシ



登野城魚類養殖場の海底



養殖場の底に散乱する養殖資材